

『教行信証』と『浄土三経往生文類』

林 智 康

はじめに

親鸞聖人の主著『教行信証』と和語の著述との関係を見ると、強い結びつきが感じられ、また思想の展開も考えられる。すでに別稿において、『教行信証』と『一念多念文意』、『教行信証』と『唯信鈔文意』、『教行信証』と『尊号真像銘文』等を論述してきた。今ここでは、『教行信証』と『浄土三経往生文類』^②の関係について考察してみたい。

一、『三経往生文類』の制作

『三経往生文類』は、浄土三部経、すなわち『大無量寿経』・『観無量寿経』・『阿弥陀経』の三経について、それぞれ難思議往生・双樹林下往生・難思往生の意を表す。そして、御自釈を述べ、関連する諸経論釈を連引され、真仮（真実と方便）を明示されている。『三経往生文類』には広略の二本が現存している。

(1) 本願寺派本願寺（西本願寺）蔵 奥書「建長七歲^{卯乙}八月六日愚禿親鸞^{八十書}之一」（略本）

(2) 興正派興正寺蔵 奥書「康元二年三月二日書写之 愚禿親鸞八十五歲」（広本）

(1) の略本は、親鸞の真蹟本であり建長七年（一二五五）八十三歳の時に書かれたものである。二十二の引文が見られる。(2) の広本は、親鸞の真蹟本と伝えられるもので、康元二年（一二五七）八十五歳の時に書写されたものである。二十七の引文が見られる。

略本は、表紙に「三経往生文類」とあり、表紙裏には「横曽根報恩寺」の墨印があつて下総報恩寺に伝来されたものであるが、いつ本願寺に移されたものかはつきりしない。本書は縦二八センチメートル、横一八センチメートルの袋綴で、半葉五行、一行十五字内外、全紙数二十四葉である。本書の古写本は、西本願寺に蓮如の写本があり、龍谷大学に室町時代末期の写本がある。蓮如本は略本真蹟本と比較すると二、

三の文字が異つていただけである。真蹟本は中外本『聖典』に収められ、『大正藏經』には真蹟本と龍大本とが対校され、『真宗聖教全書』には、真蹟本を広本として蓮如本と『真宗法要』本が対校されている。『浄土真宗聖典』原典版と註釈版には収められていないが、別冊の『浄土真宗聖典』(解説・校異)二六一—二六四頁に収められている。

広本は、表紙の中央左側にある「三経往生俊直」は親鸞の真筆、中央右側にある「浄土三経往生文類 平俊直」は本文と同筆とされるが、本文を親鸞の真筆とみえることは難しいとされる。なお、現存の広本伝真蹟本の表紙の前に外表紙があり、そこにも親鸞真蹟と見られる「三経往生」と現表紙の「浄土三経往生文類 平俊直」と同筆の「三経往生文類」の文字があつたと言われるが、現在では不明となっている。本書は縦二・五センチメートル、横二・二センチメートルの袋綴、半葉五行、一行十二字内外、全紙数三十一葉である。古書本としては、恵空写伝の一本がある。広本は中外本『聖典』、『大正藏經』に収められ、『真宗聖教全書』には本書を底本とし、恵空写伝本、『真宗法要』本、『仮名聖教』本と対校されている。『浄土真宗聖典』原典版と註釈版にも収められている。広本の表紙にある「平俊直」とはいかなる人物であるのかというと、「明月記」の元久二年(一二〇五)十一月三十日の條下に、

『教行信証』と『浄土三経往生文類』(林)

已時許除目小々伝聞、無殊事、兼時朝臣任右馬権頭、忠弘任衛門尉、日来聊成功、同示付親康、尤為面目(中略)玄藩・允平・俊直算(下略)

とある文中の人であろうと言われる。玄蕃寮所管の事務は、外国人の来朝を誘導するほか、仏寺僧尼の事務を司つた。こうした縁で、平俊直は親鸞と関係を持ったとも考えられる。元久二年は親鸞三十三歳で、法然門下の時である。

また、この広本に関連して、仏光寺派の『和語宝典』に収められている『三経往生文類』がある。広本に若干の訂正が加えられ、その奥書に、「文応元十一月三日愚禿善信・八十八歳書之」とあり、本書を広本の再治本とする説がある。しかし本書は、真蹟も古写本もなく、現存するのは『和語宝典』所収の一本だけであり、しかも奥書に「善信」という用例は、他の撰述や写伝において見られないので、本書の真偽についてはなお研究を要すべきであると述べられる。

略本の撰述された建長七年の翌年、すなわち康元元年(一二五六)に親鸞は短篇の『往相廻向還相廻向文類』を著している。真蹟本はないが、三河佐々木の上宮寺にその古写本があり、これは『和讃』や『経釈要文』等と合綴された室町時代初期の写本である。奥書に「康元^四十一月廿九日 愚禿親鸞^五書之」とあり、首題には「往相回向之文」とあるが、普通『往相廻向還相廻向文類』(『往還廻向文類』)と呼ばれて

いる。本書は縦二六センチメートル、横一八センチメートルの袋綴であり、半葉五行、一行十三字、紙数は八葉である。内容は、初めに『浄土論』の文を引いて往還二種の廻向があると示し、次に往相廻向に行・信・証があると述べ、第十七・十八・十一の三願を挙げる。最後に還相廻向について述べて第二十二願を挙げ、「他力には義なきをもて義とす」と法然上人が仰せられていたと述べる⁷⁾。

また、高田専修寺に『如来二種廻向文』という親鸞の小部撰述がある。外表紙に「如来二種回向文」と「釈願智」とあり、願智の伝持したものであるが、内表紙には「二種回向文」と「釈覚信」、本文首題には「如来二種回向文」とある。奥書に「正嘉元年丁丑三月廿一日書写之」と述べられており、『三経往生文類』広本が書写された十九日後に書写されている。『如来二種廻向文』は縦二三センチメートル、横一八・八センチメートルの袋綴であり、半葉五行、一行十四字内外、紙数は九葉である。内容は前述の『往還廻向文類』とほとんど同じであるので、その撰述の翌年正嘉元年(一二五七)にこれを書写して覚信に授けられたものと考えられる。本書は一般に親鸞の真蹟と言われるが、覚信の書写、または信性の筆であるという説もある⁸⁾。

また『往還廻向文類』は『真宗法要』に入っていないが、東西両派の学匠は早くから親鸞の真撰として疑わなかった。

従つて上宮寺本は宝暦七年(二七五七)刊行の『大谷遺法纂集』に収められ、また文久元年(一八六一)大谷派本願寺(東本願寺)から出た『浄土文類聚鈔延書』に附刻され、明治四十四年(一九一三)にコロタイプが印行されている。『如来二種廻向文』は中外本『聖典』に初めて収蔵され、『大正藏經』および『真宗聖教全書』には『往還廻向文類』とともに収められている⁹⁾。

二、『三経往生文類』の組織

『三経往生文類』の略本は、大経往生(難思議往生)・観経往生(双樹林下往生)・弥陀経往生(難思往生)の三種の往生が説かれて往相廻向について明かされているが、還相廻向については述べられていない。また真実の信と証の二法は示されているが、真実の行には言及されていない。しかし略本に見られなかった「真実の行」と「還相廻向」が広本には述べられている。これは、略本撰述の翌年、広本撰述の前年である康元元年に『往還廻向文類』が著されており、略本と『往還廻向文類』が整理統合されて広本が成立したと考えられる¹⁰⁾。

次にその内容を概観すると、略本・広本ともに観経往生と弥陀経往生については、文字に若干の異同がある程度でほとんど変らないが、大経往生については、略本から広本へは増広が見られる。『往還廻向文類』(『如来二種廻向文』)を間に入

れて、『三経往生文類』の広本と略本および『教行信証』の頁数、『三経往生文類』広本・略本・『往還廻向文類』および引用文を比較してみたい。⁽¹⁾ 原文は『真宗聖教全書』第一巻の『教行信証』は『真宗聖教全書』第二巻の頁数を示す。

浄土三経往生文類（広本・略本）・往還廻向文類（二種廻向文）・教行信証比較対照表

広本	略本	往還廻向文類（二種廻向文）	原文	教行信証
〈大経往生〉 〈往相廻向〉 〈真実の行業〉 諸仏称名の悲願 ①称名の悲願 ②称名信楽悲願成就文 〈真実信心〉 念仏往生の悲願 ③信楽の悲願 ④同本異訳『如来会』 〈真実証果〉 必至滅度の悲願 ⑤証果の悲願	〈大経往生〉	『浄土論』、二種廻向 〈往相廻向〉 真実の行業・信心・証果 〈真実の行業〉 諸仏称名の悲願 ①称名の悲願 〈真実信心〉 念仏往生の悲願 ②信楽の悲願 〈真実証果〉 必至滅度の悲願 ③証果の悲願 本誓悲願は選択本願	『大経』第十七願文9 『大経』第十七願成就文24連 『大経』第十八願成就文24引 『大経』第十八願文9 『如来会』第十八願文190 『大経』第十一願文24 『大経』第十一願文24	行巻5 行巻5—6 信巻（本）49 信巻（末）71 信巻（本）48—49 信巻（本）49 証巻103 証巻103

⑥ 同本異訳『如来会』	④ 必至滅度願文『如来会』	④ 同本異訳『如来会』	『如来会』第十一願文190	証卷104
⑦ 『如来会』	⑤ 本願成就文	真実信衆と住正定聚 真実信衆の人は等正覚・正定聚・補処の弥勒と同じ、 選択本願は法蔵菩薩の弘誓、 真実信心の念仏者は「次如弥勒」（大経）、「弥勒と同じ」（龍舒浄土文）	『大経』下巻44 王日休『龍舒浄土文』大正47・231	信卷（末）79 信卷（本）49、信卷（末）71
⑧ 必至滅度・証大涅槃願成就文	⑥ 本願成就文『如来会』		『大経』第十八願成就文24 『如来会』第十八願成就文203 『大経』第十一願成就文24	信卷（本）49、信卷（末）71 証卷104
⑨ 『如来会』 真実の称名と真実の信衆の人は住正定聚・等正覚・補処の弥勒と同じ・	⑦ 必至滅度願成就文『如来会』		『如来会』第十一願成就文203	証卷104
「次如弥勒」（大経）	⑧ 『浄土論』（『往生論註』）		『大経』下巻44	信卷（末）79
⑩ 『浄土論』（『往生論註』） 妙声功德・眷属功德	⑧ 『浄土論』（『往生論註』） 妙色功德・眷属功德		『往生論註』下巻324—325	証卷104・105
⑪ 『往生論註』大義門功德	⑨ 『往生論註』大義門功德		『往生論註』下巻325—326	証卷105
⑫ 『往生論註』清浄功德	⑩ 『往生論註』清浄功德 （難思議往生）		『往生論註』下巻319	証卷105、真仏土巻133
義なきを義とす				

〈還相廻向〉 ⑬『浄土論』利行満足 還相の廻向 一生補処の大願 ⑭大慈大悲の願 如來二種廻向 眞実信樂・住正定聚・ 他力 ⑮『浄土論』回向 『大經』の宗教、 〈難思議往生〉		〈還相廻向〉 ⑮『浄土論』利行満足 還相の廻向 一生補処の大願 ⑯大慈大悲誓願 自利利他と法藏菩薩の誓願、 他力には義なきをもて義とす (大師聖人のおほせ)	『浄土論』 277 『大經』第二十二願文10 『浄土論』 271	証卷108 (『往生論註』下卷) 信卷(本) 66、証卷107 (『往生論註』下卷部分)
---	--	--	---	--

三、広本・略本と『教行信証』

『三經往生文類』の略本が撰述された時代の背景として、関東における異義の問題が考えられる。特に建長年間に入つて、有念・無念、一念・多念、造惡、無碍、自力(義・はからい)等の問題が生じた。後に起る善鸞の義絶もその代表的なものの一つである。関東の門弟が信仰上の疑義を質問し、親鸞の返答を指導書として大切に保存したために、親鸞晩年の書簡が多く残り、後に諸種の書簡集が編集されたと思われる。その中で、『血脈文集』第一通(『末灯鈔』第二通は同文)「かさまの念仏者のうたがひをはれたる事」の文は、本書の内容と

類似し、深い関連が見られる。⁽¹⁹⁾そこでは、自力と他力の区別が明確に述べられている。すなわち第十八願の念仏往生の誓願によつて眞実報土へ往生するのであるが、第十九願の修諸功德の願や第二十願の植諸徳本の願では辺地懈慢・疑城胎宮の方便化土にしか往生できないと詳細に述べられている。第十八願を眞実の願、第十九・二十願を方便の願とする三願眞仮を示される。そして、信心の人を眞仏弟子や妙好人等と言ひ、現生に正定聚の位につき弥勒仏と等しい(弥勒菩薩と同じ)と述べ、さらに、方便化土への往生のみならず眞実報土へ往生して大涅槃のさとりをひらくことは弥陀の誓願によるとして、仏恩報謝を勧められている。終りに「これさらに性

信坊・親鸞がはからひ申にはあらず候、ゆめゆめ建長七歲卯乙十月三日愚禿親鸞註書之と、直弟子性信と親鸞の名を列記して本願他力のはたらきを述べられている。

略本が性信の横曾根報恩寺に伝来し、また『善鸞義絶通知状』（『血脉文集』第二通¹⁹）が建長八年五月二十九日に親鸞から性信に送られているところから、略本撰述には善鸞の異義が関わっていると見られるが、さらに広本撰述にも善鸞の義絶と関連があると思われる。先に広本と略本を対照した如く、広本には略本になかった「還相廻向」と往相廻向の中の「真実の行業」が追加されている。『教行信証』教巻の初めに、『浄土真宗を按ずるに、二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向について、真実の教・行・信・証あり』と、明かに浄土真宗は往相・還相の二種廻向であり、往相廻向に真実の教行信証の四法があると述べている。また『浄土文類聚鈔』の行の中で「しかるに本願力廻向に、二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相について大行あり、また浄信あり」と、行と信は不離であることを明示されている。さらに証巻に「二つに還相の廻向といふは、すなはち利他教化地の益なり」、『浄土文類聚鈔』の証の中にも同文がある。また『正像末和讃』三時讃に「南無阿弥陀仏の廻向の 恩徳広大不思議にて 往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり」、「往相廻向の大慈より 還相廻向の大悲をう

如来の廻向なかりせば 浄土の菩提はいかゞせん」と讃嘆される如く、南無阿弥陀仏（名号・大行）の廻向によつて二種廻向が成り立ち恩徳は広大であり、さらに如来の二種廻向の大慈悲によつて浄土の菩提（自利利他円満成就）を得ることができる」と述べられる。上述の『教行信証』や『浄土文類聚鈔』、さらに『正像末和讃』の文から、明かに広本の大経往生に「還相廻向」と「真実の行業」が増補されたことが理解される。

また『歎異抄』第四章の「浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり」という浄土の慈悲についての文を考慮すれば、親鸞は善鸞の異義（第十八願の否定²¹専修賢善）を批判するだけでなく、自己の力（自力のはからい）の限界を知つて、善鸞の救済をすべて如来の本願力廻向に託したのではなからうか。

すなわち『三経往生文類』広本の撰述は、関東の念仏者の疑問をはじめとして、善鸞の異義や種々の異義に対して、真仮分別（真実と方便、大経往生²²難思議往生、觀經往生²³双樹林下往生、弥陀経往生²⁴難思往生）を明示するとともに、また善鸞義絶の体験を通して、本願力回向による還相廻向、衆生利益を述べ、そして善鸞の救済に対する親鸞の思いが含まれていると考えられる。

親鸞は『愚禿鈔』上巻に「『法事讃』に三往生あり 一つ

に難思議往生は『大經』の宗なり 二つに双樹林下往生は

『觀經』の宗なり 三つに難思議往生は『弥陀經』の宗なり」と

述べ、善導の『法事讃』に三往生があつて、(一)難思議往生―

『大經』、(二)双樹林下往生―『觀經』、(三)難思議往生―『弥陀經』

と配分している。しかし『法事讃』上巻においては「難思議

往生案

双樹林下 往生案

難思議 往生案

」と一連の文として一行おきに

八回述べられているのである。すなわち原文においては三往生案の区別は見られない。それを親鸞は三往生に三經をあてて真仮の分相(真仮対弁)で示されている。

また『教行信証』証巻の標拳には「必至滅度之願 難思議

往生」とあり、また化身土巻の標拳にも「無量寿仏觀經之意

至心發願之願 邪定聚機 雙樹林下往生 阿弥陀經之意也

至心回向之願 不定聚機 難思議往生」と、三往生は部分的で

はあるが三經・三願・三機と関連して述べられている。そして

化身土巻真門釈には「三願転入」の文が述べられている。

是れをもつて愚禿の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依

りて、久しく万行諸善の仮門を出で永く雙樹林下往生を離る、善

本徳本の真門に回入して偏へに難思議往生の心を発しき。然るに今

特に方便の真門を出でて選択の願海に転入せり、速かに難思議往生

の心を離れて難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓良に由有るかな。

親鸞は七高僧の導きによって、万行諸善の仮門Ⅱ第十九願

の要門を出て、善本徳本の真門Ⅱ第二十願に回入され、そして

今特(まさ・こと)にその方便の真門を出て選択の願海Ⅱ

第十八願の弘願に転入されたのである。すなわち第十九願から

第二十願への回入、第二十願から第十八願への転入を合

せて三願転入と言われ、この三願転入は親鸞の内面の精神的

過程を述べられたものである。この三願転入の時点について

は諸説があるが、別稿で述べているのでここでは言及しない。

三願転入の体験の自覚が、後に『教行信証』成立の基礎と

しての要門・真門・弘願をはじめとする六三法門(三三法門)

を生み出す元になったのである。さらに『教行信証』化巻要

門釈・真門釈においては、『觀經』・『阿弥陀經』にそれぞれ

隱彰顯密義(隱顯)があると述べられている。真仮説は真(真

実)と仮(方便)を明確に区別して、仮を廃し真を立てる思

想であるのに対して、隱顯説は仮なるものを真に誘引する方

便権用(手だて・手段)の思想である。

この『三經往生文類』には隱顯説は見られないが、真仮説とともに隱顯説を考慮して読むべきであると思われる。

1 拙稿『教行信証』と「一念多念文意」(『印度学仏教学研究』

第四六卷第二号)、『教行信証』と「一念多念文意」(『真宗学』

第九七・九八合併号)、『教行信証』と「唯信鈔文意」(『真宗

学』第九九・一〇〇合併号)、『教行信証』と「尊号真像銘文」

(二)『龍谷紀要』第二一巻第一号)

『教行信証』と『浄土三経往生文類』（林）

一九八

- 2 以下『三経往生文類』と略す
 - 3 宮崎圓遵著『親鸞書誌学の研究』（『宮崎圓遵著作集』第六卷一〇四頁。大原性實氏解説和文篇（『定本親鸞聖人全集』第三卷、和文・書簡篇）二四五—二四六頁。
 - 4 宮崎圓遵著『前掲書』一〇六一—一〇七頁。大原性實氏解説『前掲書』二四七頁。
 - 5 大原性實氏解説『前掲書』二四七—二四八頁。『浄土真宗聖典』（解説・校異）一八頁。
 - 6 宮崎圓遵著『前掲書』一〇七頁。大原性實氏解説『前掲書』二四八頁。『浄土真宗聖典』（解説・校異）一八頁。
 - 7 宮崎圓遵著『前掲書』一〇四—一〇五頁。大原性實氏解説『前掲書』二七五頁。『浄土真宗聖典』（解説・校異）二二頁。
 - 8 宮崎圓遵著『前掲書』一〇四頁。大原性實氏解説『前掲書』二七四—二七五頁。『浄土真宗聖典』（解説・校異）二二頁。生桑完明氏「高田古典の解説に対する批判に就て」（『高田学報』第二号）。
 - 9 宮崎圓遵著『前掲書』一〇六頁。大原性實氏解説『前掲書』二七五頁。
 - 10 宮崎圓遵著『前掲書』一〇六頁。大原性實氏解説『前掲書』二四八—二四九頁。普賢晃壽氏『浄土三経往生文類』の一考察—親鸞聖人の三経観—（『真宗学』第九七・九八合併号）
 - 11 幡谷明著『浄土三経往生文類試解』（六七—七八頁）には、浄土三経往生文類略本・広本・如来二種廻向文対照表として全文が出されているが、ここでは広本・略本・往還廻向文類の順序に、御自釈の重要な語と引用文を示す最初の語を挙げて作成した。ただし紙枚の關係上、ここでは大経往生の文のみ揚げ、観経往生および弥陀経往生の文は省略せざるをえなかった。
- 12 拙稿「親鸞聖人の書簡（消息）と『末灯抄』（『龍谷紀要』第一二卷第二号）および拙稿「親鸞書簡と異義」（『印度学仏教学研究』第四〇卷第二号）参照。
 - 13 『真宗聖教全書』第二卷・六五八—六六一頁。（以下『真聖全』と略す）。14 正親含英『浄土三経往生文類講讀』六一七頁。15 『真聖全』第二卷・七二七—七三〇頁。16 『真聖全』第二卷・二頁。17 『真聖全』第二卷・四四三—四四四頁。18 『真聖全』第二卷・一〇六頁。19 『真聖全』第二卷・四四六頁。20 『真聖全』第二卷・五二二頁。21 『真聖全』第二卷・七七五—七七六頁。22 『真聖全』第二卷・四五七頁。23 『真聖全』第一卷・五六五—五六六頁。24 『真聖全』第二卷・一〇三頁。25 『真聖全』第二卷・一四三頁。26 『真聖全』第二卷・一六六頁。
 - 27 拙稿「真実と方便の關係—『教行信証』の「化身土巻」を中心に—」（渡邊隆生教授還暦記念『仏教思想文化史論叢』）
 - 28 六三法門（三経）（三願）（三門）（三蔵）
大 経—第十八願—弘 願—福智蔵
觀 経—第十九願—要 門—福德蔵
弥陀経—第二十願—真 門—功德蔵
- （三機）（三往生）
—正定聚機—難思議往生 —真実（真）
—邪定聚機—双樹林下往生 —方便（仮）
—不定聚機—難思往生
- 29 拙稿「前掲論文」参照。
- 〈キーワード〉難思議往生、双樹林往生、難思往生、真仮（龍谷大学教授）